

大如擘指徐音許偉切此蟲虫二字不同而蟲字或省作虫漢碑唐扶頌云德及草虫干祿字書云虫蟲上俗下正是也遂與蝮虫字無異然其義可以音別之廣韻以訓鱗介總名之虫字收之七尾非是源君舉收七尾之虫字云與蟲通用亦承是誤也

〔干祿字書平聲〕虫蟲上俗下正

〔類聚名義抄十〕虫與蟲通用蟲上俗下正

〔日本釋名中〕虫は蒸也濕熱の氣むして生ず

〔東雅二十〕蟲ムシ 古事記に太古の事ををるせし語にウジタカルといふ事見えたり萬葉集抄

にムシとはむらがり繁しといふ詞なりムとウとは同韻相通なればムシをウジといふは本韻

なれば本韻につきてウジワクなどいへりと釋せり後代に及びてムシをば蟲の字を用ひウジをば蛆字を用ひぬればムシといひウジといふ異なる者の如くにもなりたる也古語にムとい

義あり高皇產靈神の名を古事記には高御產巢日神としるせし如き即是也ムスといひムシといふそのスといひムシといふは詞助也蟲なムシといふはた其生ずるを云ひひしなるべしウジといふは轉語也或説にムシとは蒸也濕熱の氣蒸而生ずる也と思はれず

〔倭訓栞前編三十一〕むし 虫をよめり生也生化の多きをいふなりむしけらといふ詞もうつば

物語に見えたり

〔物類稱呼二〕螻蛄略○中

て虫類をいふなり

〔空穂物語後隆〕あすらいかれるかたちをいたしてなむちなによりてかあすらの萬劫のつみ

のなかばはすぐるまでとらおほかみむしけらといへども人のけちかきをあたりによせず山のほとりにかゝりくるけたものはあすらの食とせよとあてられたり

〔和漢三才圖會五十二〕蟲音仲乃生物之微者其類甚繁有足曰蟲無足曰豸裸毛羽鱗介之總名也與虫